

努力は裏切らない！ 学問の楽しさ、喜びは 専修大学が教えてくれた

看護師として働きながら、
「人間や社会をもっと理解したい」と、
23歳で法学部に入学した長坂さん。
学問に目覚め、のちに大学院で医療経営の
MBAを取得。全国107名(千葉県内3名)
しかいない老人看護専門看護師に
認定されるなど快挙を成し遂げています。
現在、開設100年を超えた
キッコーマン総合病院で
看護部長を務めています。



長坂奎英さん(平9・法律)

キッコーマン総合病院看護部長、
老人看護専門看護師

ながさか たかえ ●東京都生まれ。1997年、法学部法律学科卒。高校から看護専門学校卒業後、看護師として東京慈恵会医科大学附属柏病院入職。看護に従事しながら93年専修大学入学。国家公務員等共済組合連合会九段坂病院、真覆会野田病院を経て98年キッコーマン総合病院入職、現在に至る。

小児病棟での医療に疑問 ケアには人間と社会の理解が必要

専修大学卒業生の中でも、私の経歴は、かなり異色ではないかと思えます。看護師として働いていたのですが、23歳のときに社会人入試制度を利用して、法学部二部に入学しました。

看護師になったのは、「手に職をつけたかったから」なんです。「白衣の天使に憧れて」といった志望動機はありません(笑)。高校時代は部活動に打ち込んでいて、3年の夏休みが終わるころ、ようやく進路のことを真剣に考え始めました。長姉が大学卒業を控え、就職活動中だったのですが苦戦していました。その姿を見て、「就職に困らないように、資格が取れる学校

に行こう」と考えたのです。ただし、「働くのなら社会に貢献できる仕事がしたい」と思い、そうしたら、「看護師」という職業が頭に浮かんだというわけです。母が看護師の資格を持っていた影響もあったかもしれません。

私は野田市に住んでいたのですが、看護学校卒業後は千葉県柏市にある大学病院に就職しました。小児病棟を担当していた2年目のある日のこと、重病で余命いくばくもない小学生の男の子が、か細い声で、好物だった「たこ焼きを食べたい」と言い出したのです。食事を摂れない状態だったのですが、何とか願いをかなえてあげたくて、周囲のスタッフにも協力してくれるように相談しました。ところが主治医が反対し、私がかためらっているうちに、

男の子は亡くなってしまいました。新米の看護師だった私が、医療の経験豊富な医師に反論できる余地はありません。とはいえ、病院の対応が「本当に患者さんやご家族のためになったのか」と納得が行かず、悶々と悩む日々が続きました。そんなとき、新聞でふと目に止まったのが専大の社会人入試制度の広告でした。それが「大学に行こう」と思ったきっかけでした。

私は高校を出て、すぐに看護専門学校に入り、そのまま看護師になったので、世の中の仕組みがよくわかっていませんでした。「よりよいケアをするためには、医学の専門知識だけではだめだ。人間や社会をもっと深く理解する必要があります」と感じたのです。法学部に入ったのは、社会の礎である法律がわかれば、「人間や社会のこともよくわかるのではないか」と考えたからです。それに、もともと社会の動きに関心が高かったこともありますね。学生時代に弁護士や政治家をめざしていた父の影響だと思えます。

社会人入試制度は当時、ほかの大学でも実施していたのですが、受験資格の年齢が高く、23歳から受験できたのは専大だけでした。それと個人的な理由ですが、入るなら「駅伝の強い大学」と決めていました。私は昔から箱根駅伝の大ファンで、お正月に沿道で「母校の旗」を振って応援したかったんです。専大は箱根の常連校だったので、ポイントが高かったんですね。

成績優秀で2年生から特待生 ゼミを掛け持ち、サークルで幹事長

学費を稼ぐため、看護師の仕事は続けていました。専大に入って1年4か月後、東京都千代田区の九段坂病院に転職しました。神田キャンパスに近く、勤労学生への優遇制度もあったからです。靖国神社の傍にある病院の寮に入

り、初めての一人暮らしも経験しました。大学と病院と寮を、自転車でぐるぐる回るという生活で、とても忙しかったのですが、充実した毎日でしたね。

自分で言うのも何ですが、成績は優秀でした(笑)。132単位のうち、Cが1個、Bが一桁で、あとは全部A。勉強したかったからでしょうね。どの講義もおもしろく、いつも教室の最前列の席に陣取って、先生を捕まえては質問攻めにしていました。高校を出て何となく大学に入ったのではなく、私には入る目的がはっきりしていたし、自分で出した学費の「元を取ってやろう」という欲があったんでしょう(笑)。そのおかげで、1年生の成績が学部で5位以内になり、学費を免除される特待生に、2年生から4年生まで続けて選ばれました。そんなわけで、実は学費があまりかかりませんでした。

法律の最高法規である憲法を学びたいと考え、3年生から内藤光博先生のゼミに入りました。卒業論文のテーマは、看護師にも関わりの深い「生命倫理」です。さらに政治学の深澤民司先生にもゼミに特別に入れてもらい、「ゼミのかけ持ち」をしていました。単位認定はされませんでした。当時話題になった「在日外国人の参政権」について、政治学の卒論も提出しました。



(上) 入学式を迎え「入るのがうれしくて」／(下) 1年生のころ。法学研究会の模擬裁判で裁判官を担当



とはいえ、勉強ばかりしていたのではありません。「大学生になったのだから、キャンパスライフも楽しみたい」と思い、「法学研究会」というサークルにも入っていました。授業の関係で二部のメンバーだけでしたが、法学部だけでなく、経済学部や商学部の学生もいました。さまざまな時事問題について講演会を開催したり、模擬裁判を開いたり。もちろん、コンパやスキーにも行きました。3年生になって、幹事長に就任しました。

大学で学んだことが人生で役立つ 卒業生の人脈も一生の財産

専大を卒業後、野田市のほかの病院に2年勤務したあと、1998年に当院に入職しました。結婚、出産、育児休暇を経て職場に復帰し、内科、外科、産婦人科の病棟担当を一通り経験しました。主任看護師を4年、看護部長を2年務め、2014年に看護部長に就任しました。現在、看護部のスタッフは146人います。現場を離れたくなかったのですが、上司の説得もあって引き受けました。「先輩ナースたちが私にしてくれたように、後輩たちがいきいきと働けるような環境づくりを、今度は私がする番だ。そのほうが、患者さんのためにもなる」と思ったからです。

校友の皆さんには、「努力は裏切らない」ということを伝えたいですね。専大で学んだことは、私の人生にとっても役立っています。たとえば、医療でもコンプライアンスや個人情報保護が重視されるようになりましたが、当院の看護部では私の方針で倫理教育を徹底してきたので、倫理に対する認識は極めて高いと自負しています。私は立場の弱い人たちの「声なき声を聞く」ことをモットーにしていますが、法学部で人権尊重というリーガルマインドが身についたからかもしれません。



2012年8月にリニューアルしたキッコーマン総合病院にて

学問の楽しさ、喜びを教えてくれたのも専大です。そのおかげで向学心に目覚め、新しい知識や経験を得ることに積極的になりました。「医療マネジメントとよりよいケアの両立」を追求したくなり、04年に日本大学の経営大学院に入って医療経営を専攻、MBA(経営学修士)を取得しました。その後、今後は高齢者の急増に対応しなければならないと考え、千葉大学大学院看護学研究科に進学し老人看護を学びました。

専大では、それ以外にも一生の財産を得ることができました。卒業生の人脈です。キャンパスには警察官や自衛官、国税専門官など違う職業の勤労学生が集まっていたので、大いに刺激を受けましたし、今でも彼らと交流があります。それに、「千葉県東葛北部医療圏」には、専大OBが多く、医療活動などでいろいろ協力してもらっています。地元の校友会の集まりに参加する女性が少ないせいか、私はけっこう人気があるんですよ(笑)。

私は、限りある人生を悔いなく生きたいので、いつも全力疾走です。「生命の尊さ、はかなさ」を、日々の現場で身をもって痛感しているからかもしれませんね。(談)

撮影=加々美義人